

お茶うけ 第73話

犬が自立する心を高めてくれた

前回に続いて、『犬が生きる力をくれた - 介助犬と人びとの物語 -』をとり上げ、一つのエピソードを紹介します。受刑者のメアリーに育てられた介助犬ターシャと、足の不自由な14歳の黒人の女の子ステファニーの話です。

介助犬ターシャは、大柄で頑丈な体と優しい性格を持った雌犬で、犬好きのメアリーによって優れた介助犬に育てられました。やはり人と犬にも相性があるのでしょうか、ターシャは、最初の受け取り手の車椅子の男性から、「うまく扱えない」と返されてきました。次いで、多発硬化症の女性を受け取り手に選びましたが、「元氣すぎててもあます」と再び送り返されたのです。

ある日、たまたま介助犬の訓練場を訪れたステファニーにターシャを引き合わせたところ、両者の息が不思議なくらいにぴったり合ったので、ステファニーがターシャの受け取り手となりました。

ステファニーは、生後4か月で両親と一緒に事故に逢って両親を亡くし、自身も大怪我をしました。脊髄を傷めて筋力の発達が遅れ気味の上、多量の出血で脳にも影響を受けて知的発育が遅れています。孤児となったステファニーは、白人の養父母に引き取られて育てられました。

ステファニーは不自由な足に支持具を付ければ歩けますが、筋力が弱いので転ぶとなかなか立ち上がれません。そのため、人に頼らなければ自分は何もできないと思い込み、引っ込みがちで、人と話すことも少ない、自立心の弱い子供でした。

でも、介助犬ターシャがきてからは安心です。ステファニーが転ぶと、ターシャが直ぐに寄り添って腹這いになり「ブレイス(支えよ)」の姿勢をとります。ステファニーが、その背中に手を付くとターシャはゆっくり立ち上って、ステファニーが起き上がるのを助けます。

ターシャと一緒にステファニーは、次第に前向きに行動するようになります。大きなターシャを連れて車椅子で学校へ行くステファニーに友だちが増えました。教室でターシャは、いるかいらないか分からないほど静かに伏せていますが、ステファニーが鉛筆を落したときは、そっと立ち上がり、ステファニーの指示に従って鉛筆をくわえ上げて渡します。

ターシャを連れて車椅子で外出すると、ステファニーは気づかぬ人から声をかけられ、会話する機会が増えました。また、ターシャは介助犬(SERVICE DOG)のマークの付いた赤いバッグを背中に付けているので、スーパーマーケットなどにも自由に入れますが、たとえ咎められても、ステファニーは、はっきり説明することができるようになりました。

車椅子での外出が増えれば、いろいろな危険も増えます。大きな犬がステファニーに噛みつこうと飛びかかったとき、ターシャが庇って身代わりに噛まれたまま、じっと耐えていたこともありました。

ターシャへの愛情と感謝が深まるに従い、ステファニーの心に変化が現れました。それまで、横断歩道の「止まれ」の信号で止まることが覚えられなかったステファニーが、突然、「止まれ」の信号を正しく守るようになったのです。その理由を尋ねられると、「だって、ターシャが車に轢かれたら大変だもの」と答えました。ステファニーは、自分の愛する犬を守りたい一心で、「止まれ」の信号を覚えたようです。

ステファニーの養母は、「ターシャと一緒に、人びととのコミュニケーションが増えたことで、ステファニーの自分を愛し、尊ぶ心(self-esteem)が高まりました。また、生まれて初めてターシャという責任を持つ対象ができ、その対象を守ることに誇りを感じるようになって、ステファニーはしっかりしてきました」と話しています。

このステファニーとターシャの特別な友情に対して、1997年に米国の人と動物の絆を深める運動を進めているデルタ協会から、「ニュー・ベスト・フレンド賞」が贈られました。

介助犬ターシャは、ステファニーに自立する心と生きる力を与えたのです。

以上

参考文献:

『犬が生きる力をくれた - 介助犬と人びとの物語 -』
大塚敦子著 岩波書店 1999年 6月29日 第1刷発行